

## 巻頭言：これからの「植生史研究」と植生史研究会

植生史研究会の会誌「植生史研究」は次号から総説・原著論文を主体とする総合誌に変身することになりました。これまでに、年間1号発行を年間2号発行とする、総説には英文要旨を付ける、といった編集方針の変更をしてみましたが、これらは会誌の内容をより豊富なものとする、広く利用されること、および編集をスムーズに進めることを考えてのことでした。その結果、4号以降は年間に掲載できる記事が多くなり、会費を上げることなく紙面を有効に使うことができるようになりました。今回の変更も基本的にはこうした趣旨に沿ったものですが、これまでのシンポジウムや談話会の内容を中心とした、いわば依頼原稿の多かった総説誌から完全な自由投稿制の雑誌スタイルに変えたことがこれまでと大きく異なる点です。これまでのスタイルに批判があったわけではありませんが、あえて変えることになったのは次のような理由によります。近年では新しい貴重な事実が急速に蓄積されつつありますが、どちらかと言えばそれらは報告書や研究連絡誌などに埋もれてしまいがちでした。その理由は多様だと思いますが、これまでにない豊富で質的にも高い貴重な資料が遺跡発掘調査など主としては行政調査からもたらされることが多く、普及力の乏しい報告書に概要が記述されただけか、あるいは審査されない素原稿のまま掲載されることが多いようです。幅広い植生史研究では、それら貴重な資料が広く読まれ引用されることを達成するのも大切なことでしょう。また、これまでの総説誌は、たとえ自由投稿をうたっていても、シンポジウム・談話会の話題の内容が中心になりがちで、皆さんの研究成果を大いに盛り込めるという状態ではありませんでした。いろいろな考えを持たれる多くの会員を擁する植生史研究会は、本来、自由に考えをぶつけていくことを大きな目的としてきました。会計面では決して十分な状態ではありませんが、運営面では落ち着きがみられてきた今日では、いよいよその達成を目指すのも大切なことでしょう。

会誌が総説・原著論文を主とする雑誌に変身するのにともない、会誌への投稿規定もかなり改訂されました。原著論文を受け付ける以上、和・欧文ともに投稿可能ですが、欧文は現編集委員会の審査体制に沿って英文に限ることにしました。投稿規定にも、また綴じ込みにもありますが、総説・原著論文・解説は8ページ以内となっています。冗長さを避け、可能な限り簡潔な原稿にさせていただくためでもあります。また、編集の能率化をはかるために、綴じ込みにあるように年に2回の投稿期日を設定しました。1号にかける編集期間を最低4か月と見込んでの設定です。編集作業をスムーズに進め、刊行時期を安定させるための工夫ですので、皆さんのご協力をお願いいたします。

会誌のスタイル変更とともに、シンポジウムのあり方も考え直さなければならなくなりました。植生史研究会にはいろいろな分野の方々がおられますが、分野によって考え方も大いに違い、研究対象の扱い方も様々ではありません。そうした違った視点・考え方に理解を深めるというのも、当初からの大きな目的の一つでした。相互理解なしに狭い範囲に固執したり牽制するのはよくありがちなことです。決してある一つの考え方に執着するということではなく、また協調しようというのではなく、むしろ独自性を失わず、膝を交えて活発な議論をしようというのがシンポジウム開催の趣旨でした。これまでは運営のペースをつかむために事務局で行事のほとんどを協議してきましたが、上記の趣旨に沿って、いよいよよりオープンな方向性に転じたいものです。そこで意見を集約した結果、綴じ込みのようなテーマ＝シンポジウムで話題提供を募集することになりました。今後のテーマ決定や行事運営は行事委員会を中心に拡大委員会などで協議されることになっています。

話題が少し変わりますが、自然科学では遺跡発掘調査やそれに関連した調査研究を蔑視する傾向が一部にあります。それでもいいかも知れませんが、人間の関わるころはどうか、あまりはつきりとした理由を聞いたことがありません。私自身は、遺跡発掘調査は大変重要であると考えています。しばしば遺跡の発掘調査からは植生史研究にとって質的にも量的にも優れた情報もたらされます。もっと理解を示すことが大切であると思いますが、そのためには植物学は植物学のみならず、地質学は地質学のみならず、考古学は考古学のみならずという考えが必要なのではないでしょうか。今年のシンポジウムは11月14・15両日、久しぶりに大阪市立大学で開催されることになっています。テーマ「弥生時代以降の植生変遷と破壊」は、広い領域に関わるとの意見の一致から決まりました。多数の方々の話題提供と活発な討論を期待しております。